

新しい時代の羅針盤

天神北から都市高速に乗って東に向かうと、左手に博多港が望めます。そこに久しぶりに巨大クルーズ船が停泊しているのを見かけました。クイーン・エリザベス号です。博多港でこれだけの大型客船を見るのは3年数か月ぶりのことでした。

その翌日、「福岡大名ガーデンシティ・パーク」というすっかりお洒落な名前になった旧大名小学校校庭で、「福マルシェ」というイベントが開催されるということで、覗いてみました。「オーガニック」や「地産地消」をテーマにしたマーケットで、地ビールやジビエなどの出店が芝生のうえに軒を連ね、多くの人で賑わっていました。

それにしても、半世紀以上まえ、毎日仰ぎみていた大名小学校の校舎の小さなこと。そのあまりの小ささに、哀れさえ感じてしまいます。その姿はリッツ・カールトンに気押されて、萎縮しているようにも見えました。

ところで、豪華客船を久しぶりに見ても、小洒落たマーケットを覗いてみても、やっとコロナ禍が明けつつある清々しい感覚とは程遠いのは、なぜなのでしょう。コロナ禍前にただ戻るだけの日常に対する、不安や戸惑いだけなのでしょう。

おそらくそれは、一直線の時間の流れが突然中断されることを知ってしまったこと、そしてパンデミックが一回きりのアクシデントではなく、感染症以外の予測外の出来事も、世界を容易に別のものにしてしまうことを、肌感覚で知ったこと。それらが原因なのだと思います。

そうだとすると、私たちに必要なのは、何が起こっても決して揺らぐことのない、羅針盤のようなものではないかと考えました。

■ はるか遠くの目標

われわれを導く羅針盤といえば、先人の話がいくつも思い浮かびます。

武道家の甲野善紀さんが、松林左馬助という名人の江戸城内で披露したとする、超人的な演舞を、遠い目標として掲げているというのを讀んだことがあります。水平線の向こうにうつすらと見える陸地の影のような、はるか遠くの目標を北極星のように追うのだそうです。

それから、河合隼雄さんのエッセイで讀んだ、こんな話を思い出しました。

何人かの人が漁船で海釣りに出かけ、いつのまにか夕闇が迫ってしまった。あわてて帰りかけたが潮の流れが変わって、方角がわからない。そのうち、誰かが灯を消せと言うので、その通りにすると、あたりは真の闇となった。しかし目がなれてくると、遠くの浜の町明かりで、その方向がぼんやり明るくみえてきたので、帰るべき方角がわかり無事に帰ってきた。そんな話です。

しかし、パンデミックは遠くの目標をしっかりと見据えていれば、いずれ明るい未来にたどり着くという世界観そのものさえ、虚しいものに変えてしまったように思います。

■ 近くと遠くの両方の目標

國分功一郎の近著『目的への抵抗』は、コロナ禍での経験をもとに、われわれにとっての「自由」を論じた好著です。ここでその内容に立ち入ることは避けませんが、同書のイントロ部分に、私は深い感銘を受けました。著者は高校生や大学生に向けた講演会のなかで、困難のなかでとるべきパースペクティブについて触れているのです。少し長くなりますが、引用させていただきます。

僕がよく学生に言っているのは、とりあえずまずは目の前にある短期的な課題に一生懸命に取り組みなさいということです。(…)

その上で、自分の人生においてもものすごく遠くにあること、将来についてのものすごく漠然としたことを、何となくでいいので考えておいてほしい。曖昧でよいのです。

つまり、ものすごく近くにある課題とものすごく遠くにある関心事の両方を大事にする。なぜこんな話をするのかというと、その間にある中間的な領域のことはなかなか思い通りにならないんですね。どんな大学に行きたいとか、どんな会社に行きたいとか、そういったことはなかなか思い通りにはなりません。ですからそこに目標を置いてしまうととても苦しいことになる。(…)

短期的な課題を一つ一つこなしていくと、課題で求められていたこと以上の何かが身につきます。人の話の聞き方だったり、自分の特性についての理解だったり(…) 短期的な課題はたくさん教えてくれる。その上で、遠くにある自分にとっての大切なことをボンヤリとでも思い描いていたなら、人生におけるブレを不必要に大きくしないで済むように思います。先ほど言った、中間的な領域での思い通りにならないことによって必要以上に振り回されずに済む。(20-21 頁)

遠くの目標を見誤らないようにするだけではなく、近くの課題にも全力で取り組む。この二方面を大事にするよう心がけるといえるのです。

コロナ禍でわれわれは、これまで経験したことのない課題を突き付けられました。感染症の予防対策や、仕事上の意思疎通のあり方など、待たなしで具体的な対応を迫られた3年間だったと思います。そして、定例の行事や事業計画など「中間的な領域」が、思うにまかせないことを痛感した時期でもありました。

よく考えると、遠くの理念を大切にしつつ、短期的な課題にも全力を傾け、思うにまかせぬことには一喜一憂しない姿勢は、優れたリーダーによって体現されていました。ただそれを、きちんと言語化されることは少なかったようにも思います。コロナの落ち着いた今だからこそ、この羅針盤について改めて考えたいと思います。(所長 瀬戸 英晴)